入賞

「壁」をつくるのは誰だ

帝塚山大学 3年　川田 彩乃

高校のオープンスクールで見た、白衣を着て颯爽と実験をこなす先輩の姿に憧れ、受験した理数科。無事合格し、私は俗にいう「進学校」に通うことになった。新しい学校生活に、胸を高鳴らせて挑んだ入学式だったが、日が経つごとに高校と私の間には大きな「壁」がそびえ立つことになった。

高校の勉強は「大学受験のため。」「この問題は受験に出るから。」口を開けば受験。「学校って受験のためにあるんだっけ。」自分が一体何のために高校へ行き勉強しているのか、その意味を見出すことができなくなってしまった。実は高校を卒業したら、就職して社会に飛び出そうという計画を練っていた私。高校で純粋に「勉強」がしたかっただけなのに。毎日「壁」を感じながらひっそりと生きていた。

「壁」の要因はこれだけにとどまらない。「これからの時代、理系が勝ち組。」「この学校以下の学校は終わり。」そんな言葉をためらいもなく言う先生、その言葉に順応し、その気になるクラスメイトが許せなかった。「仲間との間に『壁』を作ってはいけない」と私たちに教え続けていたのはいったい誰だ。紛れもない、先生だ。高校と私の間には、さらに大きな「壁」ができた。その時、ある考えが私の中に舞い降りた。「壁」を乗り越えるのではなく、ぶち壊すことにしたのだ。

勉強の成績だけが人間の価値を決めるのではない、という考えを持った人間の存在こそがその「壁」をぶち壊すと考えた私は今、大学で教育について学んでいる。「壁」のぶち壊し方はまだ分からないが、教育の仕方次第で子どもたちの姿が変わっていくことは確信した。「壁」を作る人間になるのか、「壁」の存在をおかしいと感じる人間になるのか、そしてその「壁」をぶち壊す人間になるのか、それは教育次第、つまり先生の手にかかっているということを。